

Title	聖フランシスコ・シャヤ `` エルの終焉 : その忌日に就いて
Sub Title	On the last day of st. Francisco Xavier
Author	吉田, 小五郎(Yoshida, Kogoro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.2 (1933. 5) ,p.45(217)- 69(241)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330500-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖フランシスコ・シャギエルの終焉

—その忌日に就いて—

吉田 小五郎

序

日本に於けるキリシタン運動の先覺聖フランシスコ・シャギエルの名は、今日あまねく世に知られてゐる。聖人に關する文獻の甚だ多いことは、之を覗く者の寧ろ以外とするところである。昨秋書肆丸善樓上に開かれた天正使節渡歐三百五十年記念珍籍展覽會に於てすら、その二十有數種を見ることが出来た。従つて聖人の文字に依る肖像は、かなりの密畫に於てこれを見ることが出来るのである。

然るに彼が終焉歸天の日に至つては、諸書の記載は一致を缺き、更に根本史料に溯つて愈々曖昧模糊の中にある。未だ五十歳に滿ざること遠き聖人は晩年既に白雪を戴いたとその書翰中に自ら記してゐるが、本忌日の問題の如きは、蓋しその銀線の一本にも等しき小やかな問題ではあらう。然し、頃日予は

本問題に甚だ興味を覺えた。未だ結論には到達してゐないが、聊か知り得た所を上人終焉の事情と合せて述べて見たい。

一、聖人の忌日に關する三説

(A) フランシスコ・シャギエル聖人が歸天の日として、最も廣く世に行はれてゐるものは、一五五二年十二月二日(金曜日)のそれである。これはトルセリエ(註二)やルセナ(註三)のシャギエル傳を初として、教皇ウルバノ八世の發布にかゝるシャギエル謚聖の勅書(註三)(一六二三年八月六日附)その他比較的早く刊行せられた聖人の傳記は、多くこの説を採り、近くは、この問題に特に關心を持たれたるミシエ(註四)ル師の如き、依然この十二月二日説を支持してゐる。

(B) 然るに、近世早くピレネエを越えてアジユダ文庫を訪れ、未刊の文書を多く使用して、かの名著聖フランソア・ザビエー傳二卷を著して世に問ふたレオナルド・クロス(註五)師は、聖人が歸天の日を俄然、十二月二日より十一月二十七日(日曜日に)に繰り上げた。今日既に之に依つて聖人の忌日を記した著書もあらはれてゐる。

(C) 然し問題はこれで終つてゐない。今日教會内で行はれてゐる祝日表にある聖人の祝日は、十二月三日であり、而も既述の諸書に比して近く刊行せられ、博引旁證信賴するに足るアレキザンドル・ブルー(註六)師や、現代シャギエル聖人研究の第一人者たる、ゲオルグ・シュールハムメル(註七)師の如き、共にこの説を採

つてゐる。

以上の諸説は一體何を根據とするのであらうか、以下順を追うて記すであらう。

(註一) トルセルリニ (Torsellini) の初版は一五九四年に出で、翌々九六年に再版が出てゐる。獨立せる書冊の形を以て世に出た最初のシヤギエル傳である。(書物春秋二十號所載トルセルリニがシヤギエル傳の目次参照) 予が據つたのはその英譯である。
The Admirable Life of S. Francis Xavier.

(註二) ネゼナのシヤギエル傳の初版は一六〇〇年に出づる。予の據つたのは、その新版 Luena "Vida do Padre Francisco de Xavier" Paris-Lisboa 1921, I

(註三) Léon Pages: Lettres de Saint François Xavier. Tome II. P. 502. (Bulle de la Canonisation de Saint François Xavier, célébré par Grégoire XV. publiée par Urbain VIII ナンテ語の原文と佛譯がいつづる。)

(註四) P. L. Michel: Vie de Saint François Xavier pp. 552-564.

(註五) P. L. Jos-Marie Croes, S. J. Saint François de Xavier. 2vols. Paris. 1900.

(註六) A. Brou S. J. Saint François Xavier, 2vols. Paris 1923.

(註七) Georg Schurhammer, S. J. Der heilige Franz Xaver 1925. Freiburg.

二、聖人終焉の事情と十二月二日を以て忌日とする説

聖人は一五四一年四月七日、その第三十五回目の誕生日に、テージョ河畔ベレムの塔下を出帆し、翌四二年五月六日本願の地印度(ゴア)に到着した。^(註二)爾後十有餘年、彼の東奔西走、南船北馬、眞に休みなき活動の日が続いた。その奮闘の有様は、聖人自らの手に成り今日なほ遺る夥しい書翰にまぎ／＼と讀むことが出来る。彼の屢々行つた奇蹟にも増して、あれほどの活動に十餘年を耐え得たことが寧ろ奇蹟

であると言つたコールリツヂ師の言が思ひ出される。^(註三)

日本に二年有餘(一五四九年八月より一五五一年十一月に至る)の日を送り、一度印度に引かへし、更に支那開教の篤き志を抱いてマラッカに着いた(一五五二年五月下旬)シャギエル聖人は、こゝに約二箇月近く留錫し、支那渡航の準備に多忙であつた。然し彼の良き友なる商人ディオゴ・ペレイラ Diogo Pereira を大使とし、自ら之に随伴せんとする最初の計畫は、計らずも、マラッカの知事ドン・アルヴロ・ダタイデ Don Alvaro d'Ataide (有名なるワスコ・ダ・ガーマの子) のために妨げを受け、實現することが出来なかつた。^(註四) 已むなく、ペレイラの持船「サンタ・クルス號」 Santa Cruz に身を托して、七月半ばマラッカを發し、翌八月の末、終焉の地上川島^{サンシヤン}に着いた。彼と行を共にして、我々がその名を知り得る者は僅に左の人々である。

(一) アルヴロ・フェレイラ Alvaro Ferreira

(二) 聖信仰のアントニョ Antonio de Santa Fe 支那人

(三) クリストバル Crisobal マラバール人、從僕

(四) ペーロ・ローペス Pero Lopez 通譯

(五) フランシスコ・ダギアール Francisco d'Aguiar 按針

(六) トマス・エスカンデル Thomas Escandel ペレイラの代理人

聖人は上川島に到着するや間もなく、熱病に冒されて約二週間臥床する身となつたが、やがて回復しひたすら閉されたる國支那入國のために身を碎いた。その間、十月二十二日と十一月十二、三日附を以て各々數通の書翰を認めた。最後の十一月十三日附の書翰を書いて約一週間後に再び發病し、更に二週間後には最早再び立つことが出来なかつたのである。種々なる事情のために聖人の臨終に列つた者としては、忠實なる支那人の傳道師、聖信仰のアントニヨ唯一人であり、眞に落漠たる臨終であつた。

この聖信仰のアントニヨが、聖人の歿後二年神弟マノエル・テイセイラ Manoel Teixeira なる者の質問に應じてシャギエルの臨終前後の事情を報告した文書がある。一五五四年九月附コチンより發したもので、アジユダ文庫所藏、クロス師によつて初めて明るみに出たものであるが、今シャギエル史料の中に(註六)收められてゐる。稍々長きに失する恐れはあるが、僅に唯一人聖人の臨終に侍した者自身の記録であり、忌日を決定する一つの標準ともなり、且つ當時の事情が良く分ると思ふから、その約四分ノ三(埋葬まで)を左に譯出掲載する。

我が最^いと親愛なる神弟よ、その薨せし時、僅に予のみ一人侍りしバードレ・メストレ・フランシスコが聖なる死去に就き、兄が知らんと欲するところを左に述べん。支那への渡航前、不快を蒙りしに拘はらず、彼は之が實行を放棄せざりき。かくて我等はマラッカを發し、平穩なる航海を續けたり。數日にして我等は支那の海岸に到着し、こゝに投錨せり。然るに按針は、彼が何處にあるかを知らず、

即ち我等が止まるべかりし港を既に過ぎたりしか、或は同所に到るためには更に前進すべかりしか、我等はこれを決する能はざりき。自然船中の者何れも同じ不審の中に在りしなり。バードレ・メストレ・フランシスコは、既に港を過ぎ、後退せざるべからざる由を按針に告げたり。然るに何人も之を信ずることを欲せざりき。然るにバードレ・メストレ・フランシスコその確信を翻さざるを以て、船長は一舟を引返さしむるに決し、果してバードレ・メストレ・フランシスコが告げし如くなるかを檢せしむることゝはせり。かくて三日の後、舟は新鮮なる食糧を積み、上川の港は、眞にバードレ・メストレ・フランシスコが語りし如く、行過ぎたりとの報を齎し歸れり。かくて、天主我等に至幸なる航海を恵み給ひ、我等は大なる悦びを以て港に引返せり。我等入港するや、同所に在りしポルトガル人等は、バードレ・メストレ・フランシスコ在るを知り、何れも出で迎へ、各々己が家に迎へんことを希望せり、蓋し何人も甚だ彼を愛すればなり。結局彼は親友ジョルヂ・アルブレス Jorge Alvarez によりて迎へられたるが、アルブレスは彼並にその伴侶を優遇せり。我等(即ち神弟フェレイラ Irnão Ferreira 並に予)は同所に滞在すること約二箇月半に及べり。

バードレ・メストレ・フランシスコは上陸するや、天主を愛する故に、彌撒を行ひ、童兒並に奴隸の子弟等に教を説かんがため、藁葺の一禮拜堂を建立せんことをポルトガル人に請へり。その數僅少なりとも、彼は彼の留まりし所何處にても爲せし如く、篤き慈悲と愛とを以て教を説くことを嘗て廢し

たること無かりき。尙ほ彼は多數の人々の告解を聽けり。又彼は、この間力めて貧民のために布施を集め、又貿易のため同所に来り居し異教徒の支那人等と屢々談を交へたり。彼は彼等と語るに、信仰上の事に觸れずして、單なる茶飯事のみを語り、以て彼等と交を結べり。彼は平素求めらるゝまゝに宇宙の構成その他之に類する哲理を答へたり。而も彼が答ふところ宜しきを得て、支那人は、バードレ・メストレ・フランシスコが甚だ學識あり行持優れたる仁なるが如しと觸れ歩けり。

偶々、バードレ・メストレ・フランシスコを篤く信じ、嘗てその彌撒に侍するを缺きたること無かりし人、病に罹れり。而も病甚だ重りたれば、己が陸より船中に運ばれんことを請へり。依りて從僕等の彼を乗船せしめんとするや、バードレ彼等に言ひて曰く「やよ、汝等は、ディオゴ・デ・カイロス Diogo de Queiros を同所に連れ行かんとすれども、今より三日の後、汝等はその遺骸を陸上に運び返ることゝなるべし」と。これ果して眞實なりき。即ちそれより三日の後、從僕等は逝ける主人を帶して埋葬のため陸上に歸りたればなり。人々之を禮拜堂に在りしバードレに通告せり。彼は直ちに遺骸を迎へて埋葬せんがため、白衣を纏ひて丘を下れり。蓋し、彼は同所にて果てし何人にも斯くはなせしなり。

バードレが同地に在りし間、彼が最も憂慮せしは、如何にして支那に入り、且つ同所にイエス・キリストの信仰を傳ふるを得べきやと言ふことなりき。この件に就き、屢々支那商人等と談を交へしに、

或者に彼に支那の王が如何なる異國人もその國內に入るを欲せず、敢て之を爲す者は嚴罰に處するを以て、入國不可能なりと語れり。他の者にとりては、彼は徳高く行持優れたる者なりと思惟せらるゝが故に、彼を同所に帶行すること可能なるが如くに思はれたりき。然し、結局前者は、バードレが支那に入することは不可能なるが如しとの説を固執せり。然るにバードレは、支那入國の我主に於ける大なる希望と、該港より入る能はざる時は、シャム *Siem* に赴き、その地より年々シャム王が支那に派遣する太使に隨從すべしとの計畫を以て、依然確固たる態度を持しゐたりき。

バードレ・マストレ・フランシスコは、斯く意を決したるまゝ、發病せり。但し輕症にして、こは疲勞と惡寒あるに過ぎざりしなり。彼は日々彌撒を廢したることなく、又同所に在りしポルトガル人の勸告によりて齋戒し、恢復せしかば、やがて再び教を説き、支那人と談を交ゆる爲、常例の勤行に従事せり。彼は遂に彼等の一人と折衝せり。然し彼が要求せしは、單に夜半我等即ち彼と予とを(何となればアルヴロ・フェレイラ *Alvaro Ferreira* は逃走したればなり)何人にも知れざるやう廣東の海岸に行して放置せらるゝことのみなりき。蓋し支那の官吏が王命により凡そ異國人を誘導せし者總てになせし如く、彼を殺すことあるを恐れたればなり。尙ほこれがために、彼は百五十バルダオス *Pardaos* に相當する多量の胡椒(彼等が甚だ珍重せる)を贈ることゝせり。かくて約成り、バードレは行きてカピタン・モール *Capitão mór* に暇を告げ、且つ該計畫實行の許可を彼に請へり。カピタンは、支那

の官吏等が彼を彼等の領地に見て激昂し、その地に在るポルトガル人に對し害惡を加へ、且つ争鬭にも及ぶこと有り得べきを以て、ポルトガル船の同地に在る間支那に入らざるべきを懇請せり。即ちバードレ・メストレ・フランシスコを見、又彼が直ちに支那に入るは、眞實ポルトガル人に對して損失を醸すこと有るべかりしなり。されば彼は彼等の船がマラッカへの歸航の途につくを待つことゝせり。若し支那人がそがために武裝を整へ、以てポルトガル船を攻撃せんとするも、彼等既に同所に在らざるを以て、その時こそ彼は初めて支那に入るを得べきなり。

當時バードレ・メストレ・フランシスコは彼を好遇せし友がマラッカに向け出發せし時、かく決心しゐたりき。而して彼を庇護し食料を給する者なく日を遷延せり。彼は屢々飢餓に迫り、予に命じて神の愛のために、未だ留まりゐしポルトガル人に若干のパンを請はんがために赴かしめたり。かくて予は同所に赴くこと屢々なりき。然れども、こは彼が甚しき窮迫に苦しむを制することなかりき。彼が氣分惡しきを覺えしは、恰もこの頃なりき。然も食するに物なく、かく不快の中にありければ、彼は予に對し沖に碇泊しゐたるディオゴ・ペレイラの船に行くこと可ならざるや否やを糺したり。予は、陸上に在りては我等しかく窮迫しゐたりしを以て、その方宜しからんと思惟せらるゝ旨、並に船中に在らば必ず養生の資を得且つ手當を爲し、自然彼の容態も快方に向ふに至るべしと答へたり。

バードレは予が説を容れ、間もなく舟によりて該船に向へり。これ火曜日 *terça feira* 午後のこと

なりき。然るに彼が船中に過し、は、僅にその夜一夜に過ぎず、而も夜中彼は、波高くして船揺れ且つ發熱甚しかりし爲、難澁せり。かくて早朝彼は、嚴しかりし寒冷を防ぐ爲に與へられし一足の羅紗製の洋袴を携へ、予と共に陸に歸れり。尙ほ彼は食料として供せられたる少量の扁桃を袖中に携帯せり。彼が船より歸りし時は、熱高く燃ゆるが如く、宛も熾^{フライサ}の如くなりき。

ジョルヂ・アルブレスと稱する彼が友なる一ポルトガル人は、彼を伴ひ行きて、己が藁葺の小屋に宿泊せしめ、且つ彼に言ひて曰く「尊師は直ちに刺洛を行はざるべからず、甚だ重態なり」と。これに對し、バードレは嘗て刺洛を行ひし經驗なけれども、御身適當なりと思はるゝ通り取計へよと答へられたり。かくて間もなく刺洛を行へり。この日は水曜日なりき。刺洛に際し、彼は失神せしが、人々が面に水を濺ぎたれば、彼は我に歸れり。間もなく、彼は甚だ不快を覺えたり。而も全く食事を執ること能はざりき。翌木曜日 quinta-feira、人々彼が熱の加はるを見、刺洛を行ひしに、彼は再び失神せり。聊かの食事も執ること能はず、又熱の爲にしかく甚だ苦しみつゝも、なほ彼は耐忍我慢、何人も彼が一語をも發するを聞くを得ざりき。該木曜日、早朝彼は譫言の發作に襲はれたり。然るに之が繼續中、彼は嘗て不條理に歸し得べき一語をも發せざりき。兩眼を天に向け、眞に喜々なる面貌、優れたる容色、又宛も説教し居るが如き高聲を以て、彼はそれが我等の言葉にて語られざりし爲、予が了解し得ざりし若干の談話を爲せり。然し予は、左の言葉は、了解し得ざりし他の多くの言葉と共に

に反覆さるゝを聞きたるを以て記憶に止めたり。Tu autem meorum peccatorum et delictorum miserere
(汝、我が罪と我が過とを憐み給へ)斯くの如く、彼は五六時間の間、誠に大なる熱心を以て語り、
又常にイエスの聖名を口誦めり。木曜日 quinta feira と金曜日 sexta feira の二終日、彼は痛く忍耐
し、且つ稍々良好にて、侍せる者に何等の勞をも與へざりき。彼は刺洛を行ひし水曜日 quarta feira
より土曜日 sabbado に至るまで、依然食事を執らざりき。土曜日 sabbado 彼は終に語を發し得ざる
に至れり。

予これを知るや、我主が速かに彼を召さんことを望めるが如くに思はれたれば、予はこの土曜日
sabbado より日曜日 domingo に至る夜警戒すべきを覺悟せり。事實、予は徹宵警戒しゐたるが、彼
は常に、予が彼の許に置きたりし磔刑像に兩眼を離たず向けるたりき。日曜日 domingo の曉に及びし
頃、予は彼が將に息絶えんとしつゝあるを見たり。而して予唯一人彼と共にありて、彼の手に蠟燭を
置きしに、彼は主の中に永へに眠り、彼の聖なる靈魂は、この傷しき生涯を離れたり。殆んど苦悶な
く、又息切の音もなく、又液體の流出もなく、彼はこの世に於て、信仰及び我主イエス・キリストの御
名の宣揚と宣傳との爲に負ひし幾多の事業の報酬を受けんがため、聖なる生涯に入れり。バードレ・
ストレ・フランシスコがこの永遠の生涯のため、この現世を去りしは、廣東 Cantão と相對したる上
川島 (ilha de St. Chão) の藁葺の小屋の中に於て、日曜日にして一五五二年十二月二日夜半二時 (duas

horas depois da meya noite aos 2 de Dezembro de 1552) のことなりき。

聖なるバードレは死去せしも、その面容は、容色依然として麗はしく朱色薔薇色を帯び、恰も生けるが如く、又恟に我主の王國に在るを思はしむるのみなりき。

故に我主イエスが、それを所有する價值なきこの傷ましき世より、この聖なる仁を我等が持去るを至當と判せしを知り、予はこれに就きてカピタンに勸告し、遺骸を埋葬せんがため、同所に在りたる裝飾と他の必要な品を得んが爲に赴けり。然れども聖なるバードレの死去を知りし若干の人々は、既に集りゐたり。予は彼等を彼の遺骸の傍に残しをき、彼等も予も、聖なる伴侶の死去を悲しみたりしが―予は船に赴けり。彼等は聖なるバードレの死を知りし時、何れも自ら慙懃なる談話を奪はれたるを甚だ悲しみ、心痛して止まざりき。かくて予は、裝飾品を帶してバードレの遺骸の許に急ぎ歸れり。而も予は、彼の面容が予が先に残したりし時の如く麗はしく、欣然たるに會へり。眞に彼は死したりとは思はれざりしなり。予が同地に在りし總ての人々の大いなる苦悶と共に埋葬せんとするに當り、予は支那人が死者を密閉したる棺に納め埋葬する習慣あるを想起し、バードレの遺骸を右の如くして埋葬するを以て宜しからんと思へり。予はジョルヂ・アルヴレスにその意見を敲きしに、彼も亦可ならんと言ひければ、直ちに棺を調製せしめたり。棺成るや、予は二人の *mulatos* (黑白の混血兒の意) に助力を求めて、聖なるバードレの遺骸を納め、次いで彼等と予とのみにて、我等は一舟に乗じ、バードレ

の遺骸をディオゴ・ペレイラの船の向ひ合へる島の他の海岸に運搬せり。同處は船の乗組の人々來りて宿泊する所にして、又遺骸に對し、墓所の用に資せんがためには最適の地たりしなり。我等は同所に深き穴を穿ち、之にバードレの遺骸を納めたる棺を下せり。我等は尙ほまた三人にて穴を覆はんとせし時、恰も奇蹟——親愛なるイルマンよ、兄弟これを知るなるべし——を現はさんことを希望し給ひし我主天主はジョルヂ・メンデス Jorge Mendez といへる予と共に在りし二人の mulatos の中一人の心中に、我等が遺骸の上下に數袋の石灰を挿入するの可なるべきを思付かしめたり。事實石灰は肉體を滅却すべく自然骨骼のみ残るべき筈なり。恐らくは、若干のポルトガル人は斯くして出發前、バードレ・メストレ・フランシスコの遺骨を見、或は更にこれを取りて印度に携行せんと希望し居し者ありたるなるべし。我等は三人とも、これ宜しからんとの同意見にて、直ちに行きて四箇の大袋の石灰を求めたり。次いで我等は棺を開き、石灰を納めたる後、再びこれを穴の中に置きたり。我等は穴を埋め、地を相してよくならせり。我等はその上に若干の石を置き、後に同所を訪るゝ者に、こゝに聖なるバードレ・メストレ・フランシスコの遺骸あるを示すことゝはせり。斯くの如く、天主の偉大なる從僕は、二人の mulatos 支那人なる予、並に遇々來合せたる一ポルトガル人の僅かに四人の助力によりて埋葬せられたり。何となれば、他の者は皆嚴しき寒氣のために、敢てその家を出でんとはせざりき。彼が埋葬せられたるは彼が逝きし同じ日曜日なる一五五二年十二月二日午後 (Foy sepultado o

mesmo domingo que falleceo a horas do meyo dia, aos 2 de Dezembro do dito anno de 1552.) のことなりき。

よりて十二月二日日曜日埋葬せられ、印度に船の歸る期日二月十七日まではそのまゝなりき。

(以下略)

以上が、支那人聖信仰のアントニヨのテイセイラへの報告である。そこには明らかに聖人の忌日を十二月二日日曜日と記してある。(後に記す如く十二月二日は、實は金曜日なのである)

而してこのアントニヨなる人物であるが、彼はシャギエルが支那開教のためマラッカに向つて出發した當時二十歳前後、既にゴアの學林に在ること七八年に及んでゐる。善良にして、智徳共に優れ、頼むに足る人物なることは、ゴアで暫く彼と起居を共にし後年日本に來朝したルイス・フロイス師 P. Louis Frois の語るところである。^(註七) 又一五八三年マカオに於いて既に年老ひし彼に會ひ、聖人の臨終の模様を聞いたワリニヤニ師 P. Valignani も、亦彼の人物を稱へてゐる。^(註八)

然し一五七四年巡察使として印度への出發に際し、耶蘇會長メルキュリアン P. Mercurian 續いてアクワギブ P. Aquaviva より、シャギエルの生涯に關する文書と情報の蒐集を依頼され、而も一五八三年にアントニヨに面會して一五九二年シャギエルの傳記を書いたワリニヤニ師は、聖人の忌日を十二月二日としてゐる。^(註九)

こゝに注意すべきは、アントニョの記述が、聖人の歸天直後に書かれたものではなく、その間既に二年の歳月が流れて居り、又現にアジュダ文庫に藏する文書は、アントニョの自筆でなく寫本の寫本、つまり二重の寫本であるといふことである。

なほ他に、聖人の死後、比較的遠からざる年代に書かれて十二月二日を以て聖人の忌日とするものを擧げて見よう。

セバスチャン・ゴンサルベス *Sebastian Gonzalves* はその著印度史 *Historie Indice*^(註11) に於て、聖人が逝去した當時上川島にゐたフランシスコ・ゴンサルベス *Francisco Goncalves* と稱する富商 (*o rico chin da Chyna*) がその備忘録 *memorial* の中に、彼は十二月二日金曜日に逝去したと記した由を述べ、結局「予が最も確實なりと思はれる説は、耶蘇會で一般に通用してゐるもの、即ちフランシスコは十二月二日土曜日朝(土曜日については後に述べる―筆者)死去したといふのである」と言つてゐる。然しクロス師は、自説を述べるに當り、商人ゴンサルベスは、聖人が歸天後、遺骸となつて上川島を後にするの日、即ち翌一五五三年二月まで船中に在り、聖人死去の事は僅かに人傳によつて知つたものである、不幸にして彼はマラッカに到着するや真先に之を語り、かくて十二月二日死去の説はマカオよりゴアに、ゴアより更に全世界に廣まつたものであるといつてゐる。^(註12)

又後に日本に渡來したメルシヨール・ヌニェス師 *P. Melchior Nunéz* は、一五五四年十二月二日附の

書翰を以て「使徒逝去の折(上川島に)居合した人々特に按針」^(註一四)から聞いたと言つて、やはり聖人が十二月二日金曜日に死んだと記してゐる。^(註一五)

神父ペドロ・デ・アルカソフ師 F. Pedro de Alcazova は、一五五四年十二月、コインブラに於ける神父等に書翰を送つたが、その中に、彼は日本を發して、シャギエルに會へる心算で一五五三年十月十八日上川島に着いた所、聖人は前年の十二月二日の夜半に逝去した由を知つたと記してゐる。^(註一六) それを更にアリアス・ブランドン Arias Blandon が一五五四年十二月二十四日附を以て耶蘇會に宛てた書翰に傳へてゐる。^(註一七)

以上に擧げた記載は、何れも聖人の歸天後比較的近く記されたものである。皆十二月二日と明らかに記してゐる。

要するに十七世紀初頭に於ては、この説が一般を風靡したものであらう。先に擧げた、ホラチョ・トルセリニ、ジャン・デルセナ、その他一六二三年の教皇ウルバノ八世の諡聖の勅書等皆十二月二日の説を守つてゐる。なほその後のニーレンベルヒ^(註一八) Eusebio Nierenberg、ブーウール^(註一九) Dominique Bouhour を初めとして、多くの著者がこの説を踏襲してゐる。

(註一) 一五四二年一月一日附モザンビーク發書翰 (Thibaut: Lettres de S. François Xavier) 幸田博士「シレムの塔と上川島」(和蘭夜話) 參照

(註二) 一五四二年九月二十日附ゴア發書翰 Thibaut. S. J. Lettres de S. François Xavier. vol. I. P. 27.

(註三) H. J. Coleridge: The Life and Letters of St. Francis Xavier.

(註四) この間の事情は拙著「聖フランシスコ・シヤギエル小傳」参照

(註五) 一五五二年十月二十二日上川島發書翰 Thibaut. IV. P. 87.

(註六) Monumenta Xaveriana, II. pp. 787-798. ホルトガル語の知識貧弱なる予は、最初クロス師の佛譯 Gros: Saint François de Xavier, II. pp. 343-354 に依つて譯出したる後、嚴密に葡文の原文と一々對照して、之を訂正し、幾分の脱落を補ひ、相違ある時はホルトガル文の方をとつた。日附の原交通りなることは言ふまでもない。

(註七) Gros. II. P. 340.

(註八) Gros. II. P. 354.

(註九) Michel: P. 554.

(註一〇) 一八九九年マドリで刊行された Monumenta Xaveriana の卷頭に載つてゐる。

(註一一) Monumenta Xaveriana I. P. 191. II. P. 896.

(註一二) Monumenta Xaveriana II. P. 814.

(註一三) Gros. II. P. 357.

(註一四) フランシスコ・キアールといふもの、シヤギエルの崇拜家、聖師が逝去の後、その長靴を貰つて悦んで大切にしてみたといふので *pilote de botin* の名がある。

(註一五) M. A. F. Lettres des missions du Japon P. 32.

(註一六) Ibid., P. 19.

(註一七) Ibid. P. 46.

(註一八) Eusebio Nierenberg: Ictus Virtut in Algunos Claros Varones de la Compania de Jesus. 1645. vol. III. P. 186.

(註一九) Dominique Bouhours: La Vie de Saint François Xavier. 1683. P. 534.

三、十一月二十七日を以て忌日とする説

聖人の忌日を十二月二日より俄然十一月二十七日(日曜日)に繰り上げようとしたのはクロス師であ

る。彼は如何なる根據に依つて之を主張するのであらうか。^(註一)

クロス師は、先づ聖人の臨終に唯一人侍した支那人、聖信仰のアントニヨに絶對の信用を置いた。先に擧げたフロイスやワリニヤニの言を引用し、又同じく先に予が長々しく譯出掲載したテイセイラへの報告中、同僚クリストブルが臨終の聖人を苦しめたることやジョルヂ・アルヴレスの逃走^(註二)に對し沈黙を守つてゐること、己が功を誇らざること、マラッカの知事ドン・アルプロ・ダタイデの代理人なるポルトガル人に對する態度の寛容溫健なること等々彼が床しき態度を口を極めて稱揚し、彼を甚だ信すべき人物となした。そして彼は偶々セバスチャン・ゴンサルベスの印度史^(註三)の中に左の記事を發見したのである。

聖なるバードレに隨伴せし支那人アントニヨ・デ・サンタ・フェが、神弟マノエルに送りし書翰中、(シヤギエルが)十一月二十七日日曜日 *vinte sete de Novembro em domingo* に薨去せしことを記し、而も同書翰中その事を三度繰返しあるを予は見たり。

更にもう一つクロスの説の根據となつたのは、一五八三年以前にマカオに於てアントニヨに會ひ、その話を傳へたワリニヤニ師の書翰^(註四)の中に「彼等(船中の人々)は、最初神父が斯くも重態なりとは思はざりき。事實、病は重かりしもその期日短く、五日間繼續せり」といふ記事を見出したことである。

以上の二つの記事によつて、クロス師は直ちに今日アジュダ文庫に保存せられてゐるものは、必ず修正を加へられたものである、最初十一月二十七日とあつたものを十二月二日と書き變へたものであると

論斷した。この書翰の筆寫に當りたるバラダス師 (P. Barradas) は、正直にして信用するに足る人物であり、ゴアよりマラッカに送られた原本の寫しを忠實に謄寫したのであらうが、ゴアより送られた寫本が既に修正を加へられたものであると斷定した。而して自らの斷定に篤き自信を持つクロス師は、アジュダの寫本を初めて佛譯して世に問ふに當り、大膽にも讀者に一言の斷りもなく十二月二日金曜日とある所へ十一月二十七日日曜日と置きかへたのである。^(註五)

然らば、今日アジュダに存する寫本は何故に十一月二十七日日曜日とあつたものを、態々十二月二日と改竄を加へる必要があつたか。之に對するクロス師の説明は明らかでない。

たゞクロス師は先にも記したやうに専ら支那人アントニヨとセバスチャン・ゴンサルベスを信用して、十一月二十七日説を主張し、十二月二日説の不合理を説いた。十二月二日説の不合理とは何か。クロス師の説く所は次の如くである。^(註六)

(一) 先に記した印度史の著者セバスチャン・ゴンサルベスやルセナは、聖人埋葬の日を特に日曜日としてゐる。そして兩者は、聖人死去の日を十二月二日土曜日と説く。然し實際は、十二月二日は土曜日ではなくて、金曜日である。従つて、聖人が二日(金曜日)に歸天したものとし、日曜日に埋葬されたものとすれば、埋葬の日は十二月四日となり、その間二日を隔つ。之は奇怪であると言ふのである。

(二) もう一つは、聖人死去の日を假に十二月二日として、それに先だつ病氣日程の割當である。ア

ントニヨは、病氣の重つた日を二十日としてゐる。(クロス師はかう説いてゐるが、アントニヨの記事に二十日といふ明瞭な記載はない。シャギエルが支那入國の爲に、彼を廣東に渡すべき支那人を待つてゐることゝ、その頃發病したことが記してあるばかりである。たゞ陸上に於けるよりも手當のために宜しからんといふので、火曜日・に船に移つたことが最初の目當となるばかりである。(先に譯出引用したアントニヨの報告について見られたい。)そして、同じくアントニヨが後にワリニヤニ師に語つた聖人の病氣が五日續いた云々の記事により、十一月二十日に發病して十二月二日に死去したとあつては、殆んど病氣の期間は倍加され、不合理であるとする。(然しこの不合理も、クロス師が聖人の忌日を十一月二十七日(日曜日)と斷定した上で成立せしめたものであつて、忌日を十二月二日としても必ずしも不合理とはならない。何故なれば、十二月二日以前の火曜日即ち十一月二十九日を假に船に乘移つた日とし、その前日の二十八日に發病したものとしても、矢張り、病氣期間は五日間となり得るからである。)

聖人の忌日を十一月二十七日とする説は、かくの如くしてクロス師によつて主張せられた。

(註一) Gros, II. p. 340-357.

(註二) ジョルヂ・アルザレスは、諸書の傳へる所によれば、シャギエルの發病前、姿を匿し、刺洛その他の世話に任せしは、ディオニ・ザス・デ・アラエン Diogo Vaz de Arag n である。この點アントニヨの記するところと異なる。

(註三) Monumenta Xaveriana, II. P. 814.

(註四) Gros, II. 引用 p. 354.

(註五) Gros, II. p. 349, 351.

四、十二月三日を以て忌日とする説

最後に十二月三日(土曜日)を聖人の忌日としてゐる人には、アレキザンデル・ブルー師やゲオルグ・シュールハムメル師がある。何れも聖シャギエル傳の研究者として錚々たる人々である。之まで公にされた聖人の傳記は殆んど全部とも言ひ得べき程に十二月二日説を持してゐるのに、何故ブルー師やシュールハムメル師が敢て十二月三日と記されたか、必ず深き根據あつての事であらうが、予は不幸にしてその理由を予の見た著書に讀むことが出来なかつた。尤もブルー師に「聖シャギエルは何日に薨去せしや」の論文がある筈であるが、予は未だ一覽するの機會を得て居らぬ。予は兩師が果して何を根據とせられたか詳にせぬが、その病氣の經過を記述するに、多くアントニヨの報告を元とし、その曜日、原文に容赦なく十二月三日を忌日とするやうに排列しかへたやうにも見える。

それにつけても、アントニヨの報告を受けた、かのマヌエル・テイセイラの記したシャギエル傳には、明らかにシャギエルの忌日を十二月三日土曜日と記してゐる。^(註四)又、先に引用した通り、セバスチャン・ゴンサルベスは、その印度史に於て、ルセナはそのシャギエル傳に於て、夫々、聖人歸天の日を十二月二日土曜日に作つてゐる。然るに事實、一五五二年十二月二日は金曜日であり、土曜日は翌三日である。従つて、日と曜日とのいづれかを選ぶとして、假に土曜日を生かすとするれば、ゴンサルベスやルセナの

記事は、或は十二月三日の誤謬かも知れぬと解せられないことはない。

又聖人の遺骸埋葬の日をゴンサルベスやルセナが特に日曜日に當てゝゐることに對し、クロス師が十二月二日金曜日から一日間ををいてゐるのを不審としてゐるが、翌日とすれば幾分緩和されるかも知れぬ。一體アントニヨの記述を仔細に見て行くと、(クロス師の如く死去の日を變ずるも亦同じ)種々なる疑問が起るが、就中、聖人が午前二時頃に歸天して、その同じ日の午後埋葬されたといふのは餘りに慌しすぎるやうに思はれる。何となれば、聖人の死後、アントニヨは、ポルトガル人の船に走りて聖人死去の報を齎し、且つポルトガル人を伴ひ種々なる裝飾品を得て歸り、死者に對する儀禮を行ひ、特に支那式の棺を調製して、之に納め、一人の混血兒ジョルヂ・メンデス並に二人のポルトガル人の手を藉りて小舟に乗せて、今迄の場所の反對側の海岸に漕ぎ寄せ、地を相して穴をうがつて納めようとした。愈々埋葬の時になり急に混血兒メンデスが思ひ出して、棺中に石灰を入れることゝし、再び小舟によつてポルトガル船に漕返し、石灰の大袋四箇を得て元の場所に戻り、棺を開いて之を納め愈々埋葬したといふが、之だけのことが午前二時から午後の二時までの半日に行はれたといふのは、受けとり難いことにも思はれる。

(註一) A. Brou: Saint François Xavier, II. p. 362-366.

(註二) Georg Schurhammer: Der heilige Franz Xaver pp. 267-269.

(註三) アレキザンドル・フルー師に左記の論文がある筈で、予は本篇執筆の前に二三心當りを探したが、遂に見ることが出来な

つた。どなたかお持合せの方で、数日間でもお貸し下されば幸甚。 Quel jour mourut S. Fr. Xavier. (Recherches de Sciences Religieuses. 1916, pp. 325-330)

(註四) Monumenta Xaveriana II. p. 896.

五、結 語

大體以上で、予は聖シャギエルの忌日が今日なほ確かならず、而も三説あり、これが何に基因するかを紹介したつもりである。然し予は、遺憾ながら、未だその何れに従ふべきか、今急に之を決することが出来ぬのである。更に史料を蒐集し整理して、又大方の示教を仰ぎ、他日再びこの問題を論ずる日のあるべきを期する者であるが、今この紹介の筆を措く前に、聖人が發病の日の基點と、その經過とを述べ、而して忌日の問題に觸れる便りとしてたい。

支那人アントニヨの報告には、聖人發病の日を明らかに記してない。即ち聖人が支那入國の日を待ちつゝあることを記した後、「彼が氣分惡しきを覚えしは、恰もこの頃なりき」と、甚だ漠然としてゐる。然るにセバスチャン・ゴンサルベス^(註一)は、聖人の發病を十一月二十日(日曜日)とし、トルセリニも亦「支那に渡航すべき日即ち二十日宿主の不人情(ジョルヂ・アルグレスの失踪を指す)より起る」といひ、テイセイラヤルセナには共に「發病以來八日目即ち十一月二十八日」なる記事が見える。而してアントニヨの記述には、火曜日より日曜日に至る病氣の經過を比較的に詳しく語り、最後の土曜日より日曜日

にかけて愈々危篤に陥れる由を記してゐるが、愈々最後の日となつて日と曜日の組合せを二日誤つてゐる。一五五二年十二月二日は金曜日であり、忌日に先だつ曜日による病氣の經過より推して日曜日を生かすとすれば、この日は十二月四日となる筈である。

次に聖人發病の日の起點を、諸書に見える十一月二十八日を發病以來八日目とする十一月二十一日、若しくはその前後として、アントニヨの記す、火曜日船に移る云々の記事―その火曜日を幾日に宛つべきかを少しく考へて見たい。

今日まで、多くの著者^(註二)が、發病以後最初の火曜日即ち十一月二十二日を以て、これに宛てゝゐる。クロス師、ミシエル師、シュールハムメル師等、いづれもさうである。予も亦シュールハムメル師の著書を踏襲して拙著「聖フランシスコ・ジャギエル小傳」^(註三)に於てこれを採用した。然し此の火曜日を、更に一週間繰り下げ十一月二十九日の火曜日に宛て、この日を以て、聖人の病が愈々重態に陥つた日と見るのは如何なものであらうか。かくして、發病は二十日若しくは二十一日、重態に陥つたのが二十九日、二十九日以後五日間この状態が續いた、かく考へる時は、クロス師が言ふ發病十一月二十二日、逝去十二月二日その間約十一日と、ワリニヤニがアントニヨより傳へ聞いた、聖人の病氣が五日續いたといふその間に横はる矛盾も除かれる譯である。而も、ワリニヤニの記述に依れば、「聖人の病氣は五日間繼續し甚だ重態であつた」といふ。予はこの五日間と重態といふ言葉に意味を持たせたい。

次にアントニヨは、聖人死去の日を十二月二日日曜日と、日と曜日の組合せに過誤を犯してゐる。之に類する過誤を犯せるものを更に求むれば、セバスチャン・ゴンサルベスやルセナの十二月二日土曜日がある。日と曜日との組合せに誤なきものには、フランシスコ・ゴンサルベスの十二月二日金曜日があり、テイセイラの十二月三日土曜日がある。之等の誤謬、異説を如何に處理解釋すべきか。之は他日の問題として残さう。

(註一) Monumenta Xaveriana, II, p. 812.

(註二) 多くの著者といつて、それは近頃のものである。古いものでは、逝去の日を明確に記してゐても、病氣の経過を日にかけて詳しく記してゐるものは見當らぬやうである。

(註三) 拙著「聖フランシスコ・シャギエル小傳」に於て十一月二十二日を月曜日としたのは、明らかに火曜日の誤である。

(一九三三年・一月・十六日)